

Thomas Hardy : 'A Tragedy of Two Ambitions'

井 田 米 造

‘A Tragedy of Two Ambitions’は1888年に書かれ、Life’s Little Ironies (1894)に入っている。この短篇集に入っている作品はいずれも1880年代から1890年代の初期にわたって書かれたものである。

1889年の一月に Hardy の受取った手紙の中に文芸評論家 Edmund Gosse からの手紙がある。Gosse 氏は Hardy に ‘A Tragedy of Two Ambitions’を送ってもらったことに感謝し、今まで Hardy の書いたものの中で、最も興味ある完成した作品の一つであると言っている。Gosse は前世代の卓越した文芸評論家 Matthew Arnold や Leslie Stephen の後継者といわれている。Hardy がロンドンで七十才代につくった親友である。

Hardy は当時の生活、文学的表現に対するヴィクトリヤ朝の道徳、慣習による拘束に強い不満を感じていた。

1888年の8月19日の Hardy の日記に「H. Quiltar より Magazine 誌に掲載の依頼を受け A Tragedy of Two Ambitions を送った」とある。また8月21日の日記に次の様に書いている。

「いわゆる厳格な家庭や、厳格で正しい教育を受けた人たちの書いた文学作品は多くの場合、社会的慣習や仕組、つまり人々のつくった生活様式をあたかも、生活の基本的事実であるかのように扱っているのである。」

この記録をみてもわかるように、Hardy は既成の社会機構や慣習を当然のことであり、動かすことの不可能なものとして後生大事に受けとっている人々、特に上流階級の人々に対して厳しい批評の目を向けていた。

あらすじ

Halborough 家には水車大工を父親に持つ二人の息子と一人の娘がいた。父親はもともと実直な働き者であったが、いつのまにか酒に溺れて仕事を怠ける飲んだくれになった。母親は苦勞の末、一、二年前に亡くなっていた。

長男の Joshua と弟の Cornelius を母親がオックスフォードかケンブリッジ大学に入学させようと、一生懸命に骨折って貯めておいた学資金を飲んだくれの父が、みんな浪費してしまった。

二人の息子は大学に行く望を絶たれてしまったのである。聖職者になることを目標にしていた二人は、まず小学校の教師になり、次に神学校に入り、せめて牧師補にはなりたいという希望をいただいた。

他の子供が遊んでいる時も、二人はギリシャ語やラテン語の聖書にとりくんだ。数ヶ月して兄弟は小学校教員養成所に入所するため故郷を去った。妹の Rosa はブラッセルにある学校に入っていた。

兄弟は養成所を卒業して教職についた。そして兄の Joshua は、ほどなくしてある監督区の僧正に見こまれて神学校に入った。或日弟の Cornelius の教えている小学校へ行った。弟の勉強ぶりなどを見るためである。弟は父親が自分のところにお金の無心にやってきた、という話をする。

今度は或日曜日の午後、父親は Joshua のいる神学校へ現われたのである。しかも父親はジプシー女を連れていた。その女性を自分の嫁にしたのだと言う。父親はお金の無心にやって来たのだが、Joshua は体良く断わって帰した。飲んだくれや浮浪者が自分たちの親であるということは聖職者にとっては致命的なことであるから、自分たち兄弟と可愛い妹のために、お金をなんとかして工面し、父親をカナダに移住させようと弟に提案する。

その後兄 Joshua はある教区の牧師が不在のため、その代理として新任牧師補になった。彼の初めての説教は村人たちの感情をあおり、刺激的な

ものであったので出席者はみな感動した。そしてこの教区（ナロボーン教区）の地主であるフェルマ家族のフェルマ氏とその母親も同様に Joshua の雄弁に感銘した。そして地主は妻を亡くしていたので、Halborough 兄弟の妹 Rosa を嫁に迎かえたいと話す。

Joshua は村の百姓から立派な家を借りて住むようになった。そしてその Joshua の家に弟 Cornelius と妹 Rosa がやって来て、久々の水いらずの楽しい会合になるはずであった。ところが Cornelius は兄に、父がカナダから帰ってきていて、しかも父がファントールの町の、ある民家の窓を壊した罪で七日間ほど拘留されたという記事がファントール新聞に掲載されていたことを話す。父親は娘 Rosa が金持の地主さんのところへ嫁ぐということを知ってやって来たのであった。兄弟は妹にはこのことは一切ふれないようにした。

翌日フェルマ氏とその母親が Rosa を迎えに来た。クリスマスのお祝いで Rosa はフェルマの家で手伝いをしていたが、Halborough 兄弟も招待されていた。しかし兄弟は訪問することが出来なかった。Cornelius は父親から次のような手紙を受取っていた。拘留されていた父がその日に放免されるということ。そして地主さんのいるナロボーンの村に行くのだが、途中アイベルの町を通るので、アイベルまで迎えに来てほしいということである。兄弟二人は父親に会うために待ちあわせることになっていたアイベルのカスル・インに行ったが、父親には会えなかった。お互に擦れ違いになってしまったのである。しかし兄弟は引き返す途中で父親に会う。父親はカナダに追いやられたことに立腹していて、自分が娘 Rosa の父親だから是非とも地主さんに会うと行ってきかなかった。兄弟は父親がナロボーン村へ行かないように説得したがそれは失敗だった。父親は千鳥足で歩いて行く途中水路に落ち込んでしまう。父親が落ちたのに気付いた Cornelius が急いで助けに行こうとすると、兄 Joshua は「待て、我々みんなの幸福のために」と言って弟を止めた。そうこうするうちに父親は溺

れてしまった。二人が我に返ったときには父親はもう、水門の下をくぐって見えなくなっていた。それから六ヶ月ほど経って死体が見つかった。しかしそれは身元不明の者の不慮の溺死ということにかたづいた。

Rosa は今では地主フェルマ氏の嫁になり、Joshua は他の町の教区に栄転し、Cornelius は兄の後任としてナロボーン教区の牧師補になっていた。弟は兄の Joshua に死体の埋葬と葬儀の式をやってほしいと頼んだ。

その後フェルマー家には後継が生まれ、兄弟はそのお祝にフェルマ家を訪ずれた。二人はその帰りに父が溺れた水路の草むらで白く閃めいたものを見た。なんとそれは父が水路に転落したときに、土手にほおっていった杖だった。それは父が生垣から切り取ったものだった、それを Joshua がなにげなく草むらに突っ込んでおいたのが根づいて、新しい葉をつけたのだった。二人はその木を見ていられなくなった。Cornelius は自分たちが苦勞してヘブライ書を研究したが、少しも身につけなかつたと言うと、兄 Joshua もうなずくのであった。

I

The shouts of the village-boys came in at the window, accompanied by broken laughter from loungers at the inn-door; but the brothers Halborough worked on.

(THOMAS HARDY COLLECTED SHORT STORIES, p. 432)

Hardy の短篇の書き出しには、映画的な手法を用い、読者をいつのまにかその物語の中に誘いこんでしまうものがある。

Hardy の子供時代にさかのぼるのであるが、Hardy の家からあまり遠くないところに丘があった、そしてそこには Rainbarrows と呼ばれる古墳群があり、彼は父と一緒によく訪ずれたものである。父はいつも望遠鏡を持っていて、頂上からあたり一帯を見渡し、目印になるものを指して Hardy に教えた。その目印になるものの中には父が今建築している建物

もあった。このように高所からあたりを鳥瞰的に見おろす習慣は Hardy に一生続いた。先ず全体像をながめ、その次に焦点を一つのものにしばってゆくのである。この手法が小説にもとり入れられた。'To Please His Wife' では、暗く、静まりかえった教会堂の中、執事の足音でその静けさが破れ、水夫服を着た男の黒い姿が、光を背にして現われるのである。また 'The Son's Veto' では「うしろから見る男の目には、その栗色の髪は驚異と神祕の的であった。……」このようにして若い女に読者の注目を集めたところで、夫を失った淋しい若い女の心境描写へと移る。

今述べた二篇が映像効果を用いたのに対し、本短編の場合は音響をとりあげている。村の子供たちの叫び声が遠くから聞こえていたが、それにやがて間近かな所からの人の声がまじった。その声の主は下の中庭に立っている十四才の美しい女の子で彼ら兄弟の妹であった。

It was no tale of Homeric blows and knocks, Argonautic voyaging, or Theban family woe that inflamed their imaginations and spurred them onward. They were plodding away at the Greek Testament, immersed in a chapter of the idiomatic and difficult Epistle to the Hebrews.

(Ibid., p. 432)

本篇のあとに書かれた短篇 'The Son's Veto' では息子 Randolph は父の残してくれた資金で望みどおりの教育を受けることができた、にもかかわらず、自己中心的な息子は母親に対して厳しく、彼女を不幸にしてしまう。

本篇の Halborough 兄弟の場合は、母が残してくれた学資金を飲んだくれの父親が全部浪費してしまふのである。希望する大学に行けなくなった兄弟に、只一つ残された道は、聖職者となるためになんとかして神学校には行けるように、独学をしなければならなかった。

Halborough 兄弟にとって、牧師になることが一生の夢であった。兄

Joshua が牧師補になったとき、自分の考えを弟に次のように述べている。「古風な田舎では牧師という職業は他のどの職業よりも安価にある程度までの社会的威信を興えるものだ」(Ibid., p. 445) これは Hardy 自身の考えでもあった。このように思った背景となる当時の英国国教の様子をのべてみよう。

若い Hardy はヴィクトリヤ朝の伝統的な牧師補のような容ぼうをしていた。そこで友人や親せきの者たちは、この早熟な少年はやがて聖職に就くのではないかと思っていた。独学ではあったが、聡明な若者 Hardy が聖職按手式（聖職者に任ずる式）のことを考える機は熟していた。

1801年から五十年間に England と Wales の人口が二倍に膨れあがった。1840年代には牧師の数が不足していた。いっぽう1858年までに三千もの新しい教会が建てられた。Sir Robert Peel が国教会の教務委員会を作り、牧師不在の教会の一掃にのりだした。そこで1858年には無頓着な牧師や教区をおろそかにすることはなくなった。

しかし1851年に国勢調査があったとき、この年の3月30日の日曜日に、教会に出席した者は教徒約1792万人のうち726万人にすぎなかった。つまり出席者は半数にも満たなかったのである。Hardy はノートに次のように記入している「英国国教会の信者には二種類ある。一方は教会に行き、他の一方は教会に出席する習慣がない、ところが英国非国教徒は一種類しかなくて、皆んな教会に行くのである」Hardy は英国国教会の信徒たちが、いかに教会に関心を持っていないか、ということを描き出したかったのである。そして Hardy はこのころ自分の才能を聖職者に向けようと思っていた。前途有望な若者が聖職に目を向けるには理想的な時機であった。

英国の都市産業の発展にはめざましいものがあり、生れてくる若者たちは無宗教者として成長し、キリスト教という名前すら知らなかった。教会はこれに対応するために、建物だけではなく住民の教化にも目を向けた。聖職者の候補者を神学大学からだけでなく、一般の大学卒業生からも募

集し始めた。John James Blunt 氏の著になる 'The Duties of a Parish Priest' は五年間で四板を重ねた。しかし彼のいう典型的聖職者とは上流階級出身者を想定していた。このころ England を訪ずれたある外国人訪問者は「聖職者とは……多くの場合生れがよく、資産もあり必ず教育のある紳士なのだ」と皮肉まじりに言ったということである。

そのような経歴、背景は Hardy 自身のそれとはかけはなれたものであった。だが Hardy は二十五才になるまで、なんとかして聖職者になりたいと考えていた。Hardy がロンドン大学に入学するための学則に興味を示していたことが、彼の大切にしていた The Popular Educator という本の中にある印から知られる。

Hardy の若い時の願いと、Halborough 兄弟の考えていることが重なってくるのである。資金がなくなった兄弟は聖職に就くためには、他の方法を考えざるを得なくなった。生れや学歴がものを言う聖職の世界である。高い地位にはのぼれなくとも、せめて聖職者と名のつくものになるためには、少なくとも神学校を卒業する必要があった。

A man in the light drab clothes of an old-fashioned country tradesman approached from round the corner, reeling as he came. The elder son flushed with anger, rose from his books, and descended the stairs.

(Ibid., p. 432)

兄弟がこつこつと勉強しているところへ、水車工の父親が帰ってくる。父は仕事を怠けているので頼まれている石臼、水車の受水板など、全く手のつかないままになっている。

Helmert E. Gerber 氏はこの短篇の登上人物の印象を明るい色と暗い色に分けている。「明るい娘の Rosa」「黒雲の父親」「灰色であるが黒く変る兄弟」である。冒頭で述べたが、たしかに Hardy は映像と音響を効果的に用いている。だが登上人物は上記の二種類だけではない。兄 Joshua

が見る父親と、弟 Cornelius が見る父親とでは父親の色が異っていた。弟が教師をしていたとき、その小学校に兄 Joshua が訪ずれた。その時弟は先週父が自分のところへやって来たことを話す。その時兄は父親を人生の中の a squalid spot (汚点) と感じている。次に弟が父がカナダから帰国するという郵便を受取ったと兄に話したとき、兄 Joshua は父親を 'the cloud no bigger than a man's hand' (黒雲) に例えている。'a squalid spot' にしても 'the cloud no bigger than a man's hand' にしても、兄 Joshua が父親にもった印象であって、弟 Cornelius が父親に対して感じたものではない。このように兄と弟とでは父親に対する感情に大きな違いがあった。

暗い父親という影に、いつもおびえていた兄弟ではあるが、話題が妹 Rosa になったり、Rosa がやってくるとなると、その場がぱっと明るくなるのである。Rosa はいつも「美しい娘」として登上するが、その名の表わすように「ばらの花」を思わせた。

II

牧師が自分の身内に社会の慣習に反しているとか、自分たちよりは身分の低いと思われる人の入ることを極端にきらい、それがため、男と女の間の自然な愛情を犠牲にし、自分の目標達成のために、障害となるものを排除してしまうことを主題にした短篇では 'For Conscience' Sake' (1891) や 'The Son's Veto' (1891) などがある。キリスト教の真髄は「愛」であるにもかかわらず、Cope や Randolph は世間体を気にして形式や体裁にこだわり、真の愛とはどういうものかが分っていないのである。しかもその職業が事もあるうに聖職者である、ということを Hardy は指摘するのである。

That he was watching his own career with deeper and deeper interest, that he continually 'heard his days before him,'

and cared to hear little else, might have been hazarded from what was seen there.

(Ibid., p. 434)

学資金を、父親に全部使われてしまった Joshua は自分の将来だけをまっすぐ見つめ、自分の周囲のことには一切目を閉じてしまった。これは Hardy 自身の処世訓を拒否することになる。'A Tragedy of Two Ambitions' が書かれたのは 1888年であるが、同じ年の 1月5日のノートに Hardy は次のように書いている。

「自分自身の生涯の仕事について、やたらと心配するのではなく、大いに好奇心を持つようにせよ。というのはその仕事の知的、社会的価値にどのような結果が生じようとも、それはあなた個人の幸福には、たいした差違をもたらすものではない。博物学者は奇妙な卵とか胚芽に非常な興味を示す、この興味を持つことこそ最も大切なことなのだ。」(Florence Emily Hardy, *The Life of Thomas Hardy* p. 204)

これは人生経験を重ねた Hardy が達した心境であった。自分の若い時代を振り返ってみて自分自身に与えた教訓であったのであろう。Joshua が自分の将来に対して持つ不安は Hardy 自身の持った不安だったと思われる。'The Son's Veto' の中の母親 Sophy の息子 Randolph を Hardy は「どうしたわけか、彼女の息子はその貴族的な学問や、古典文法や、いろいろきらいな学科のために、太陽や月にまで及ぶあの子供らしいおおらかな興味を失いかけていた」(THOMAS HARDY, *COLLECTED SHORT STORIES*, p. 408) と分析している。

Joshua は神学校に入学して、二年目になったとき、弟の様子を見るため、弟の勤務している小学校を訪ずれる。弟 Cornelius は現在教えている教科の指導法を説明しようとするが、兄はそのような問題には一向に興味を示さない。大切なのは現在ではなく将来であるというのが兄の考えであった。

Halborough 兄弟は教師になる前に教員養成所に入所するために故郷をあとにする。この物語の中では教員養成所が何処にあったか、についてはふれていないが、Hardy の父 Thomas II は Hardy の妹 Mary を初め Dorchester の South Street にある Miss Harvey's School に通わせた。のちに Salisbury Training College of Teachers という教員養成所に入学させている。このことから兄弟もこの教員養成所に入ったのかもしれない。'Jude the Obscure' の Sue が入学したのは Melchester の師範学校であったが、Melchester は小説の中での名前で実名は Salisbury のことである。Halborough 家を Hardy の生れた土地 Higher Bockhampton 近辺だとすると、Salisbury までは約 55km あり、当時としてはかなり遠い所であった。

兄 Joshua は教職について程なく郷里からかなり離れた監督区の僧上宛の紹介状をもらい、当地の神学校に入って二年目、弟の務めている小学校を訪れる。神学校に入学するためにはもっと勉強しなくてはいけない、と弟に忠告し、試験の時に僧上にお目にかかるのが最上の策だと教え次のように言った。

Mind you make a good impression upon him. I found in my case that was everything, and doctrine almost nothing. You'll do for a deacon, Corney, if not for a priest.'

(Ibid., p. 435)

「神学校に入学するためには、僧上に好い印象をあたえることが第一であって、教理なんて二の次である」と Joshua は教える。兄は死物狂いになってより高いところへ、高いところへと登り、少しでも高い地位を得ること以外には一切目をくれなかった。一方 Cornelius は兄の影響がなかったならば小学校の先生の生活に満足していただろう。

或日曜日の午後、父がジプシーの女を連れて神学校の Joshua のところへやってきた、父は一緒に酒を呑もうと誘うけれども Joshua はこと

わる。父は怒って帰っていった。その夕方彼は弟に次のような手紙を書いた。

The case as it stands is maddening. For a successful painter, sculptor, musician, author, who takes society by storm, it is no drawback, it is sometimes even a romantic recommendation, to hail from outcasts and profligates. But for a clergyman of the Church of England! Cornelius, it is fatal! To succeed in the Church, people must believe in you, first of all, as a gentleman, secondly as a man of means, thirdly as a scholar, fourthly as a preacher, fifthly, perhaps, as a Christian—but always first as a gentleman, with all their heart and soul and strength. I would have faced the fact of being a small machinist's son, and have taken my chance, if he'd been in any sense respectable and decent. The essence of Christianity is humility, and by the help of God I would have brazened it out. But this terrible vagabondage and disreputable connection!

(Ibid., p. 439-440)

「今のままでは気が狂いそうだ。一挙に人気を集めることで成功する画家や彫刻家や音楽家や著述家なら、日蔭者や道楽者から生れるということはいっこう妨げにはならぬ、時にはそれがロマンチックな人気の種となることもある。しかし英国教会の牧師にとっては、コーネリアス、それは全く致命傷だ。教会で成功するためには、一般の人々が彼を第一に紳士として、第二に財産家として、第三に学者として第四に説教者として、第五にはたぶんキリスト教徒として、だが第一に常に紳士として信頼してくれるのでなければだめだ。ちっぽけな水車工の息子であることには、なんら臆することなく直面し、運試しをやってみせる。ただ親がどんな点からいっても恥かしくなく、まともな人間であってくれればだ。キリスト教の真髄は謙讓ということなんだから、神のお助けによって押し通してきた。だがこのおそろしい放浪者と人聞きの悪い血縁があっては！……」

これはヴィクトリヤ朝の社会風潮に対する痛烈な批判であった。Joshua がこのような世間の風潮を無批判に受けとっていることには、問題があるとしても、彼の苦しい立場がはっきりと読みとれるのである。Halborough 兄弟は偽善によらなければ進んで行けない環境の犠牲者であった。

さて若者 Hardy は言い伝えによると、キリスト教の牧師になるための候補者を志望したが、階級 (humble origin) 上のことで受け付けてもらえなかった、としているがその事実を示す証拠はない。受け付けてもらえなかった本当の理由は Hardy の家の階級の問題ではなく、学校教育による専門的知識の不足にあったようだ。Hardy もそのことは承知していたようだ。Hardy が俗物根性のために受け付けを拒否された、という言い伝えは彼の小説、特に短篇に登上する牧師に向けた Hardy の痛烈な批判によるものである。最も嫌われる人物は 'The Son's Veto' の中の牧師 Randolph であろう。一方 Hardy 自身の体験と思われるものは本篇 'A Tragedy of Two Ambitions' である。前者は俗物根性にこり固まった牧師 Randolph が、母親のささやかなしあわせを奪ってしまうものであり、一方後者は牧師補兄弟が俗物根性を乗り越えて行こうと一生懸命に努力するが、遂にそれに呑みこまれてしまっただけで自分たちの父親を犠牲にするのである。

III

Never before had the feeling of the villagers approached a level which could be called excitement on such a matter as this. The droning which had been the rule in that quiet old place for a century seemed ended at last. They repeated the text to each other as a refrain: 'O Lord, be Thou my helper!'

(Ibid., p. 440)

Joshua は神学校を卒業し Narrobourne という教区の牧師補となった。Narrobourne 村は Hardy の小説の上での名前で Yeovil の南西約 4 マ

イルのところにある。首牧師が病身のため Joshua が代理を務めた。その日の Joshua はとても雄弁でその説教は村人達を酔わせた。彼らはみんな 'O Lord, be Thou my helper!' と口々に唱えた。引用した句は旧約聖書の詩篇30篇10である。彼の説教の内容は詩篇30：7から同30：10であったと思われる。

LORD, by thy favour thou hast made my mountain to stand strong: thou didst hide thy face, and I was troubled.

I cried to thee, O LORD; and unto the LORD I made supplication.

What profit is there in my blood, when I go down to the pit? Shall the dust praise thee? shall it declare thy truth?

Hear, O LORD, and have mercy upon me: LORD, be thou my helper.

(The Holy Bible A. V. Psalms, 30:7~30:10)

「主よ、あなたは恵みをもって、

わたしをゆるがない山のように堅くされました。

あなたがみ顔をかくされたので、

わたしはおじ惑いました。

主よ、わたしはあなたに呼ばわれました、『わたしが墓に下るならばなんの益があるのでしょうか。ちりはあなたをほめたたえるのでしょうか。あなたのまことをほめたたえるのでしょうか。

主よ、聞いて下さい、わたしをあわれんで下さい。主よわたしの助けとなってください』と。」

(旧約聖書, 1955, 詩篇30：7~30：10)

これは詩篇の作者が病気から回復することができたことに対して、神への感謝を捧げるものである。神がその御顔をかくされたとき、作者はただつつましく神に「主よ、私の助けとなってください」と嘆願する。固難なこ

とに出くわしたとき、勇気をお与え下さいと祈ったのである。Joshua は村人が感動するほどの説教をしたのだが、これは彼自身に対する教訓でもあった。飲んだくれの父親は神が兄弟に与えて下さった試煉ではなかっただろうか。神につつましく祈ることこそ苦難を克服する勇気と力を与えて下さることであると悟ることができなかった。飲んだくれの父親をもっているという障害を、自分の力づくで排除しようとしたのである。

IV

Halborough 兄弟の父親は、娘を嫁にやるならば親である自分が相手の人に会うのがあたり前だと主張し、兄弟の制止するのも聞かず、草むらを歩いていたら、突然水路に落ちてしまった。弟 Cornelius は父を助けようと駆け出した。それを兄は止める。

‘Stop, stop, what are you thinking of?’ he whispered hoarsely, grasping Cornelius’s arm.

(Ibid., p. 449)

自分達の出世と妹の生涯と幸福を考えると、その障害となるものを、手を出さずにじっとしておくだけで、取り除くことができるのである。Cornelius 一人だけだったら父親を助けていただろう。しかし兄の手を振り切ってでも助けに行かなかったために、弟も共犯者となった。この場面は George Eliot (1819~80) の後期の作品 ‘Daniel Deronda’ (1876) からヒントを得たものと思われる。Gwendolyn は夫 Grandcourt とヨットで出かける。突風のため夫が海に転落する、夫が水の中から「綱を」と叫ぶのだが、すでに心の中で夫を殺してしまっていた Gwendolyn は、手に綱を持ったまま、それを投げ与えなかった。

Halborough 兄弟の場合も同じく自分たちが父親を水路につき落したのではない。父親があやまって落ちたのだ、つまり表向きは兄弟が父を殺し

たのではない、しかし父親を溺死させたのはまぎれもなく息子たちであった。Gwendolyn が夫 Grandcourt を、心の中で抹殺していたのと同じく、すくなくとも Joshua はすでに自分の心の中で父親を殺してしまっていたのである。しかも父親を殺してしまったということを兄弟以外には誰も知っている者はいなかった、完全犯罪である。

兄弟には同情する点はたくさんあるが、それにもかかわらず犯罪にはちがいない。Hardy は1888年批評家の Edmund Gosse にこの物語は冷酷な殺人を扱ったものだ、と語っている。そして1912年に二人の兄弟が非難されるべき罪人であることを強張するために *In their pause there had been times to save him twice over.* (Ibid., p. 450) をつけ加えた。

V

地主の息子と妹の Rosa の結婚はきまり、Rosa は幸せであった。兄の Joshua は栄転し、兄のあとに弟 Cornelius がおさまり、なんとかハンデイを乗り越えて、世間からみれば最高とはいわないまでも、成功したとっていいであろう。しかし実の父親殺し、という大きな罪は裁判沙汰とはならなくとも二人の上に暗い影を落した。父親が兄たちに見殺しにされたことを全く知らされていない Rosa が、いつか誰かが助けを求めて、わたしの名前を呼んだようだ、と言ったとき兄弟は心臓に釘をうち込まれるような思いがした。弟はもはや良心の呵責に耐えられず兄に、

'From one of us. Do you think human hearts are iron-cased safes, that you suppose we can keep this secret for ever?'

(Ibid., p. 453)

と言う。彼はすでに自分達の犯した罪をざんげしているが、兄の Joshua はこの秘密をあくまでも守ろうとする。

地主 Fellmer 家に後継が生まれ、兄弟がその命名式に出席して帰る途

中, Joshua は菅の間に何か白くちらつくものを見つけた。

From the sedge rose a straight little silver-poplar, and it was the leaves of this sapling which caused the flicker of whiteness.

‘His walking-stick has grown!’ Joshua added. ‘It was a rough one—cut from the hedge, I remember.’

At every puff of wind the tree turned white, till they could not bear to look at it; and they walked away.

(Ibid., p. 454)

この silver-poplar (白楊) は父親の持っていた杖から芽が出たのである。本短篇の始めに二人の兄弟が読んでいた本は、新約聖書のヘブル書 (The Epistle to the Hebrew) であった。そしてヘブライ書にはアロンの杖として記してある。

……, Wherein was the golden pot that had manna, and Aaron’s rod that budded, and the tables of the covenant;

(Hebrews 9:4)

「この中にマナを納れたる金の壺と芽したるアロンの杖と契約の石板とあり」

このアロンの杖は神が Levi の部族を代表する Aaron に与えた祭司権の印である。旧約聖書民数記 (Number) の 17:8 に、「神はモーゼに十二部族の反逆をおさえるために、各部族の長に杖を一本づつとらせ、神の選んだ部族の杖には芽が出るであろう、その部族に祭司権を与える」とある。Aaron の持っていた杖に芽が出るのである。Halborough 兄弟の父親の杖は Aaron の杖のように族長を示すものである。飲んだくれの父親ではあったとしても、自分達を育ててくれた父親は家長である、その父親を兄弟は殺してしまったのである。またこの Aaron の杖は主の命により蛇に変わり Moses と Aaron が神の司祭であることをパロに証明され

た。(出エジプト記 7:8~7:13)

父親の杖から芽が出て新しい葉をつけ、風が吹く毎に白く見えた、二人はそれを見ていられなくなった、そして弟 Cornelius は、

'I see him every night,' Cornelius murmured... 'Ah, we read our *Hebrews* to little account, Jos! To have endured the cross, despising the shame—there lay greatness! But now I often feel that I should like to put an end to trouble here in this selfsame spot.'

(Ibid., p. 454)

「ああ、ぼくたちはヘブル書を読んでも、何にもならなかったよ。恥をいとうことなく十字架を忍びて——そこにこそ偉大さはあるんだ。だがぼくはまさにこの場所で苦るしみを終えてしまいたいとよく思うんです。」

弟はヘブル書を苦勞して読んだが、それは司祭になるための受験勉強であり、生き方の問題として、また信仰のための読み方ではなかった。下線部はヘブル書(12:2)よりの引用である。

Looking unto Jesus the author and finisher of our faith; who for the joy that was set before him endured the cross, despising the shame, and is set down at the right hand of the throne of the God.

(ヘブル書12:2)

「信仰の導師またこれを全うする者なるイエスを仰ぎ見るべし。彼はその前に置かれたる歡喜のために、恥をもいとわずして十字架をしのび、遂に神の御座(みくら)の右に座し給えり」

飲んだくれの父親は自分たちの目標を達成する道をはばむ障害物であったかも知れない。兄弟二人にとってはとても恥ずべきものと思われたかも知れないが、その恥を耐え忍んで勇氣と信念をもって、こつこつと歩いて

いってこそ真の幸福がつかめたであろうに、それができなかったのである。

テキスト及び参考文献

- テキスト THOMAS HARDY, Collected Short Stories (Macmillan, 1989)
- Kristin Brady, The Short Stories of Thomas Hardy (Macmillan, 1982)
- Florence Emily Hardy, The Life of Thomas Hardy 1840-1928 (Macmillan 1962)
- Robert Gittings, Young Thomas Hardy (Penguin Books, 1975)
- Timothy O'sullivan, Thomas Hardy, An Illustrated Biography (Macmillan, 1975)
- The Holy Bible, Old and New Testaments, Authorized (King James) Version (The National Bible Press, Philadelphia)